

I 法人の運営

- ① 会員数 令和2年3月31日現在
【正会員個人】42人／【特別会員】34団体／【賛助会員】5人
- ② 事業 市民活動支援センターからの相談依頼業務 2件

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、3月より、子育て支援拠点と親と子のつどいの広場は、臨時休館となりました。ひろば利用は休止、電話を含めた子育て相談と、横浜子育てパートナーによる相談、子育てサポートシステム事業、一時預かり事業(不要不急でないもの)は、継続しました。

II 神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ

協働の広がり・深まり

令和元年度も、神奈川区・地域との協働の基、すくすくかめっ子事業・こんにちは赤ちゃん訪問事業・子育て支援者事業外遊び活動支援事業等、様々な子育て支援事業に取り組みました。
また、福祉保健センター等各機関・施設・学校、地域の団体・個人、民間・企業と連携した、多岐にわたる事業を展開しました。各種事業の振り返りを通して、新たなニーズを掘り上げ、双方向のネットワークを深め、広げました。

妊娠期から地域に繋げる

・妊娠期から子育て期(未就学児とその保護者)の数多くの親子が、地域の”場“を訪れ、ふれあう日々を重ねました。
日常的な繋がりの中で、子育てに関する悩みに留まらず、互いに支え合う様子が伝わってきました。

神奈川区「横浜市子育て世代包括支援センターモデル事業」との連携

・横浜市モデル事業として、区に母子保健コーディネーターが3名配置されました。妊娠期からの切れ目のない支援を目指して、拠点と日常的に連携を図りました。

常設の場のカ・コーディネータースタッフの存在

・拠点という週5日の常設の“場”には、子育て中の人、地域の支援者、関係機関等、様々な人が日々訪れ、そこに、コーディネーターとしてのスタッフが常駐することで、思いもよぬ掛け算の効果が発揮される機会や、繋がりが生まれます。
拠点利用者が、様々な体験から自身の力を蓄え、磨き、地域の支援者や新たな分野の担い手となっていく、人材の循環も、日常のこととなりました。こうした人材が、また違う角度からの情報や、繋がりに、拠点を結び付けてくれました。

拠点や地域の場が社会にもたらす効果

・平成29年度、よこはま地域子育て支援拠点ネットワーク(18区の拠点による自主グループ)と横浜市、各区との連携で有識者研究所の力を借りた、拠点の効果を数値的に立証する18区のアンケート調査を基に、アンケート結果を分析・検証した「RE・デザイン」冊子を発行。拠点ネットワーク・フォーラム開催、及び各種区のネットワーク会議で発信しました。
利用回数が少なくても、支援されていると思っている人、その地域に住み続けたい、地域への愛着・関心、行政への関心が大きく違う等、親の地域社会性発達に繋がる等の効果が共有されました。

就労型社会への移行期にこそ、地域へ繋げる

・就労型社会へと移行する中、拠点利用期間が短くなっている現況や、子育て初期に親として感じる事が、自助・共助に繋がり、一瞬の出会いでも価値があれば、その人が変わっていくことを踏まえ、1回毎の来所がその人・子どもにとって、多様な人や価値観等にふれられるよう働きかけました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止対応による臨時休館(相談・子育てサポートシステム機能は継続)

・3月2日より臨時休館になりました。緊急事態宣言が発令されるまでは、ひろばスタッフによる、近隣公園への見回りや距離を保っての声かけを行ない、子育て中の人々の声を集めました。
常勤・非常勤スタッフは、相談業務の他、施設内整備(ブラインドカーテン撤去・木製扉工事発注等)、年度末年始事業振り返り、HPの更新、各種継続事業のまとめと準備、次年度地域別カレンダー更新作業等にあたりました。

1) 親子の居場所事業

① 年間登録者数：1114人(3月～臨時休館)

② 利用者数：30534人(大人13961人／子ども14124人／支援者2449人)

【父親利用】971人／【祖父母利用】171人／【きょうだい】1686組／【プレママパパ】222人

③ アウトリーチ総数：7091人(ひろばの利用者数には含まれない人数)

・就労型社会への移行、幼稚園のプレ入園の広がり等、地域の中で家庭と近隣の居場所等を利用しながら、長期にわたり子育てをする人たちも少なくなってきたことを実感する1年になりました。

これまで以上に、子どもが子どもとして育ち、その育ちを大らかに見守り合う人の輪を広げること、人と人が交差して起きる、ひろばでの出来事を掬い上げ、言語化して、その場にいる人たちと共に考え、語り合い、その人自身の変容を実感できるような時間を重ねました。

アラウンド40、子どものイヤイヤ期、国際交流、双子三つ子、療育おやこ、シングル親、ワーキング親等、各種仲間トークや、全ての事業に、交流タイムを組み入れ、「対話の場」をつくりました。

・交流を目的としない利用者にも、利用の動機に繋がるように、子育て世代にとってニーズが高いテーマを取り上げ、多様な窓口、きっかけづくりを散りばめました。(子育て世代のマネープラン・片付けが楽になる方法・食(離乳食)等)

・初めまして赤ちゃんプログラム(2回連続)・産後ピクス・親子ふれあい遊び赤ちゃん編等、産後数か月の人を対象とした事業の継続(毎月開催)により、ひろば利用に繋がり、数か月後にはひろばの支え手となり、初来所利用者や、妊娠期の人へ当事者としての横のラインでサポートする姿が日常になりました。

2) 子育て相談事業

・ひろばや出前等の年間相談件数：6942件／4423人

・定例の専門相談(発達・言葉・食生活)を開催し、各々の先生と振り返りの時間を設けました。また、引き続き、助産師やカウンセラーによるプログラムも行いました。

・子育て中の親同士の話が参考になるということを実感できるよう、プログラムをトーク形式で行いました。

・利用者支援事業“横浜子育てパートナー”や、子育てサポートシステムとの連携を、日常的に行いました。

・ひろばスタッフは、利用者の気持ちに寄り添いながら、相談に繋がりました。毎日の振り返りでは、その内容をスタッフ同士複数で共有しました。

・ひろばスタッフが、様々な情報を渡すことで、利用者自身が新たな“場”を切り開くことに繋がりました。

・相談内容も複雑化する中、地域の団体の力を借りた「女性の悩みなんでも相談」も定着しました。

・いろいろなスイッチがあることで、相談に繋がる効果を感じました。

3) 情報の収集と提供事業

・広く区民に情報が届くように、HPをスマホ版対応に変え、更に検索しやすいよう検討を続けました。

・「地域別子育て情報カレンダー」を作成・更新し、利用者へ居住地域毎に渡し、地域へ繋げました。

また、情報を更新することで、地域と連携し、地域毎の子育て支援事業に活かしました。

・拠点18区の情報担当者の会議が開催され、全区で情報についての研修を共有できるようになりました。

・横浜市子育て家庭応援事業「ハマハグ」の申請を行い、これまでのネットワークを基に、20件協賛店舗を増やしました。

4) ネットワーク事業

・すくすくかめっ子事業が、区内全域にあることで、今年度も、地域との連携を随時行いました。

他にも、ケアプラザや地区センター等各施設、機関、保育所、各団体・個人との連携・協働が深まりました。

・連携や事業が増える中、今年度は共催事業の中で参加者数が見込まれるプログラム(乳幼児救急法等)を、各地域ケアプラザの主催事業へと移行依頼しました。

空いた事業スペースに、各ケアプラザエリアのネットワークタイムの立ち上げへの関わり、共催、参加等、地域の実情に沿った連携・協働を進めました。

・子育てに関わらず分野を横断するテーマを掬い、ネットワーク交流会や学び合いの機会を多様に設けました。

・市域でのネットワーク活動に参画することで(18区拠点ネットワーク、市民活動協働推進、ネクストステージネットワーク)幅広い分野、視野からの情報共有、学び合いからの収穫を得ることができました。

5) 人材育成・活動支援事業

- ・就労型社会に移行する中で、地域活動や生涯学習に関わる人が減少する傾向が見られました。育児休業中に、地域と繋げる機会を多様に散りばめることで、仕事復帰後にも参画できるようなテーマ型の事業や土曜日の利用に繋がりました。また、アンケートでも、「地域の中で自分ができる活動を始めたいと思うようになった」という質問に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人が48.5%いました。
- ・年間を通して、週2回活動するボランティアが定着しました。利用者との交流が深まると共に、特技を活かした拠点遊具の作成等を通じたシニア世代にとっても、地域の居場所になっていることが分かりました。多様な人が常に拠点にいてくれることが、多世代のふれあいに繋がりました。
【学生ボランティア】延 46 人／【学生・職員の実習】延 64 人
【地域ボランティア】延 206 人
- ・地域から始まった「中学生と親子のふれあい体験授業」が13年目を迎えました。地域の人たちと事業の主旨や意義を共有しながら開催している中学校が3校に増え、中学生の様子を共有したり、地域で見守ってもらっている温かさを感じられる機会となりました。
- ・父親育児支援講座を開催しました(2回)。土曜日に来所する父親が増え、父親同士が繋がることで、父親独自で企画をする機会が増えました。
- ・外遊びネットワーク交流会から始まった「外そとあそび市」。外遊び応援隊やプレイパーク、親と子のつどいの広場、子育てグループ、かめっ子、かなーちえのひろばスタッフ等が、“外遊び はじめの一步”を目的に、遊びの場を開催しました。(2回)0歳児からの参加もあり、外遊びのスタートになった親子が多くいました。また、担い手同士の絆も深まりました。

6) 子育てサポートシステム神奈川区支部事務局運営事業

- ・拠点での定期的な集団説明会の他、親と子のつどいの広場や出張ひろばでの説明会を行いました。また、緊急の場合には、個別での説明会も行いました。
- ・多様化する依頼内容に、引き受ける提供会員が減少傾向にあるため、入会説明会や事前打ち合わせ等で、「有償の支え合い活動であること」「提供会員がボランティアの気持ちで活動していること」の理解を得られるよう、改めて主旨を伝えました。
- ・区、利用者支援事業と連携し、様々なケースに対応しました。
- ・会員研修会を開催し、普段の援助活動で感じる様々な思いを、それぞれの会員の立場から意見交換し、互いの理解を深めました。
- ・平成12年から横浜市がスタートしたこの事業の、時代の流れに伴う数々の課題解決に向けて、18区・区・担当局・市社協本部と共に、検討を重ねました。

① 会員数【利用会員】933 人／【両方会員】75 人／【提供会員】157 人

② 事業【入会説明会参加者】383 人／【援助実績】5477 件／【研修会】1回／【交流会】2回

7) 利用者支援事業

- ・①個別支援②地域連携を2本柱に、子育て家庭を支えるために、地域と連携しました。年間相談件：163 件。相談は、情報提供から継続相談まで幅広く、ひろばや地域と共に、経過を見守りました。
- ・地域に“伴走者”を増やすことを目的に、「子育て期の情報お役立ちファイル」(区内約200ヶ所)・「外国につながる親子のための地域情報ファイル」(区内小中学校)の更新と新たな設置を行い、より家庭に近い居場所に情報を届けました。
- ・他分野の機関と共に、事業を共催しました。最新の情報がひろばに蓄積され、日頃の支援にも活用しました。
- ・地域ケアプラザと共に、ダブルケア(介護と子育ての同時進行)当事者の対話の場づくりに取り組んできました。出産年齢の高齢化、世帯の在り方の変化により、今後益々、ダブルケアの課題は表出してくると思われます。新たに講座「知ってほしい!ダブルケア」を実施し、地域に向けて発信しました。
- ・子育て世代包括支援センターの本格実施に向けて、全区の横浜子育てパートナーと、研修や情報交換を継続し、学びを深めました。

Ⅲ すくすくかめっ子事業

- ・全体交流会：「20年目前!長く続けるあの手この手のツボを探る」講師：孫育てジャパン ぼうだあきこ氏
- ・方面別交流会：「まわしよみ新聞 編集長講座」講師：東京新聞編集局読書部 鈴木加津彦氏
この様子とかめっ子の取り組みは、東京新聞に掲載されました。
- ・かめっ子訪問：10地区
- ・大学院生の修士論文研究に、全地区で協力しました。居住する地域で行うかめっ子の活動が、支え手自身の健康にも繋がるという結果が報告され、「20周年記念フォーラム」で改めて発表の場を設けることになりました。

Ⅳ 親と子のつどいの広場事業（しゅーくるーむ）

親子が気軽に集い、交流できる居場所を、身近な地域で利用できるよう取り組む。

テーマ「みんなで育ててみんなで育つ」

1) 子育て親子の交流、つどいの場の提供

- ① 年間登録者数：64組（3月～臨時休館）
 - ② 年間利用者数：2579人
- ・初来所の人や1組で利用している人への声かけを、常連の利用者が担い、利用者も一緒に広場のことを考えていけるような仕組みが、出来上がってきました。利用者が、居心地の良い広場づくりをしていく中で、大きな力となりました。
 - ・利用者一人ひとりに合った関わり方（話を聴いてもらいたい・ゆっくり本を読みたい・情報を知りたい等）をスタッフが感じ取り、工夫することで、居心地の良い雰囲気づくりに努めました。
 - ・午前中だけ広場で過ごす、幼稚園の帰りに寄る等、利用者のライフスタイルの中に、広場で過ごす時間が定着してきているように見受けられました。
 - ・新しいイベントを取り入れたことで、それがきっかけとなり、利用する親子が増えました。

2) 子育てに関する相談、援助の実施

- ・日頃からの関わりを通して、関係性を築き、相談しやすい雰囲気づくりを行いました。
- ・利用者に合った援助を行えるよう、スタッフ自身が関連施設等に出向き、情報を収集したり、参考となる文献等を掲示したり、関連する情報を伝える工夫を行いました。
- ・広場で起きた様々な事例に関して、スタッフ間で共有し、互いの意見を交換して、しっかりと話し合うことで、一人ひとりが様々な状況に対応できるようなスキルを、身に付けることに繋がりました。
- ・利用者同士で相談・解決できるよう、スタッフがパイプ役となり、繋げたり、利用者同士で解決するヒントとなるような文献や情報を設置しました。

3) 地域の子育て関連情報の提供

- ・地域や関係施設、地域子育て支援拠点と連携し、情報収集に努め、利用者が手に取りやすいように掲示したり、各々のニーズに応じて、スタッフから手渡しました。
- ・近隣の福祉法人施設と連携を取り、共催イベントの実施やHPに広場の情報を掲載してもらおう等、交流を図りました。

4) 子育て及び子育て支援に関する講習の実施

- *かなちくタイム 3回（幼稚園イベント・ショコラッティによるコンサート・歯科衛生士による歯の話）
 - *にこにこ楽団による親子で楽しむミニコンサート
 - *ハロウィンバスツアー（近隣の老人ホームとの共催イベント） *歯科衛生士による歯磨き指導
 - *親子でボール遊び *クリスマス会
 - *みんな de 子育てワイワイパーク（保育所） *アロマイイベント（ハンドマッサージ講座・アロマスプレー作り）
 - *手形・足形アート（隔月1回） *ハピママヨガ（ホットヨガスタジオLAVAとの共催イベント）
 - *ママのためのがん検診のお話（市民病院がん検診センターとの共催）
 - *当事者イベント/ママ先生（リボンロゼッタ作り）
- 定期プログラム
- *遊ぼうデー（親子で遊ぼう） *赤ちゃんデー（ベビーマッサージ）
 - *ストレッチタイム *お話会（読み聞かせボランティアグループ）

5) 地域の子育て関係者、関係機関・団体や行政機関等との連携

- *すくすくかめっ子事業・方面別交流会
- *福祉保健センター地区担当保健師
- *保育・教育コンシェルジュ
- *地区センターとの共催企画の実施
- *スタッフが、地域の赤ちゃん学級（月1回）・外遊び応援隊（月1回）・子育て支援拠点のスタッフを兼任
- *地域の子育て支援連絡会への参加

V 親と子のつどいの広場事業（ほしのひろば）

誰でも、どんな時でも気軽に立ち寄り、のんびり過ごし、他の親子と交流できるよう取り組む。

テーマ「ほっとできる居場所☆ほしのひろば」

1) 子育て親子の交流、つどいの場の提供

- ① 年間登録者数：74組（3月～臨時休館）
 - ② 年間利用者数：2618人
- ・利用期間が短くても、ひろばを定期的に利用する人同士が交流し『ほっとできる居場所』となるよう配慮しました。
 - ・講師によるプログラムを徐々に減らし、スタッフで行う遊びの時間を不定期で設けることにより、狭い室内でも遊びの幅を広げることができました。
 - ・高層マンション群の中にある広場として、子どもたちの育ちを見守り合い、支え合う体験を重ねていけるよう、スタッフと学び合いました。

2) 子育てに関する相談、援助の実施

- ・3ヶ月に1度、横浜子育てパートナーの訪問日を設けることにより、利用者が直接、保育園情報等を聞く機会になりました。
- ・YMCA 東かながわ保育園の保育士の協力を得て、毎月先生と話をする時間を設けました。
離乳食や生活リズムの相談をし、アドバイスを受け、笑顔になる姿を多く見る事ができました。

3) 地域の子育て関連情報の提供

- ・それぞれのニーズに応じて、欲しい情報をすぐ得られるよう、掲示方法を工夫しました。
- ・利用者が、幼稚園の運動会や園庭開放の情報をまとめた掲示物を、作成してくれました。またパンフレット等を広場に提供してくれ、幼稚園情報コーナーを、利用者同士で交流しながら作る事ができました。

4) 子育て及び子育て支援に関する講習の実施

- *ゆるベジ： 普段の食事の際に野菜を取り入れる工夫や離乳食作りのコツ等、わかりやすく学び合う時間になりました。
- *離乳食&こどものごはん試食会： 管理栄養士に味付けの相談や、保育士に食べさせ方のコツ等を、聞く姿が見られました。
- *小児救急法： 急な症状や誤飲への対処等具体的な事例に基づいたお話をさせていただきました。

5) 地域の子育て関係者、関係機関・団体や行政機関等との連携

- *コットンハーバー地区すくすく子がめ隊合同 「ミニミニ運動会」「クリスマス会」
- *コットンハーバー自治会・マリナゲート自治会主催 「コットン祭り」協力
- *地区担当保健師・民生委員児童委員・主任児童委員・地域ケアプラザ・区民活動支援センター
「地域連携ミーティング」（年4回）
- *福祉保健センター・かなーちえ共催「外そとあそび市」参加